



*Congratulations!!*



でも  
意外だったな

おれはあんたが  
1位だとばかり  
思ってたぜ

先生

ブルーさん

こんな変態  
教師のことが  
いいんですか!?



まあ

俺の子猫ちゃんは  
みな恥ずかしがり屋  
だからな

客観論で  
言ってるん  
だけど…

おれがいいと  
思ってるかどうか  
じゃなくて



はあ…!?

うちの団長と  
顔は一緒でも  
中身は違う

——つて  
思ってたけど  
程度は案外  
一緒かもな…

バラの花束を持ったアキラ。とある部屋の扉の前にいる。

アキラ「ゴ、ゴホン……こ、この会場にブ、ブルーさんが……はあ、緊張するな」

トントン。扉を叩いて部屋の中に入る。

アキラ「失礼いたします」

月夜野「遅いぞアキラ」

アキラ「つ、月夜野、何でお前が……ブルーさんは……」

月夜野「先生だろ、アキラ。カフェで熱烈に俺に投票してくれたファンがいてな、逆転で俺が2位だ」

アキラ「そんなのどうでもいいんだよ、ブルーさんはどうしたんだよ！」

ブルー「はあい、みんな、あたしが碧月サーカス団の青い鳥、ロサ・ブルーよv」

アキラ「ブルーさん待ってましたっvvv こ、こ、これ……ブルーさんに……」

アキラはブルーに花束を差し出すが、彼女は受け取らない。

ブルー「はあ、終わった終わった……今日のギャラ分は働いたぞ……」と、ウィッグをバサっととりブルーからミハルに戻る。

アキラ「ええっ、ちょっと……もう、ブルーさんなのやめちゃうんですか？」

ブルー「はあ、だっておれ、3位だぜ。しかも1位と1000票差とかありえないだろ。今日はもう、これで帰るぜ」

アキラ「そ、そんなあ、おれ、ブルーさんに票入れてたのに」

ブルー「もしかして、おれの票の殆どをお前が入れたとかじゃないだろうな？ だったらなおさらアホくさ」

月夜野「それはないんじゃないかな。君の票は、アキラの他にもレプスやカイが入れているだろう……」

ブルー「えっ、そ、そうかな……やっぱ、そうだよな。サーカス団の仲間なんだから当然だよな」

月夜野「それに、俺やアキラもまた次の公演は見に行こうと思っているんだが」

アキラ「そうですよ！ おれ、いつも碧月サーカス団が来るときは、256カフェでバイトしたりして小遣いためて、毎年3回はブルーさんの公演見に行くんですよ！ 毎回ちょっとずつ違うから、目が離せなくて……」

ササッとブルーウィッグをかぶりなおして……アキラの両手を握る。

ブルー「アキラ君、次の公演も是非観に来てね。あたし、舞台からだって客席にいるアキラ君のことすぐわかるんだから。あ、今度、サーカス団の結成10周年を記念して、限定バッチも作ったんだ。よかったらお友達の間もおみやげに買って行ってね」と、ウィンクをする……。

アキラ「あのあのあの……」と、手を握られて真っ赤になるアキラ。

月夜野「商売となると変わり身が早いな、ブルー」

ブルー「まあ、これでも、芸歴10年だからな」

アキラ「嬉しいけど、なんか複雑……」

・ Tea Time

ブルー「それにしても……君の投票数、1164票って……凄いな」

アキラ「そ、それはおれもびっくりしています……」

月夜野「自分で入れたのか？」

アキラ「まさか、言っただろ、おれはブルーさんに入れたって……」

ブルー「じゃあ、君に票を入れたのは、あのいつも一緒にいる黒髪の少年か？」

月夜野「卯月なら違うだろ。あの子は、なんだかんだで自分に投票しそうだ」

アキラ「そうなんだよ……おれ、たまに本当にレンに好かれてるのかどうなのか疑問に思う時があるよ」

ブルー「へえ、君はあの黒髪の子のことが好きなのか？」

アキラ「い、いえ、おれは違いますよ！ そっち方面じゃないっす。どちらかと言えば、ブルーさんみたいなかわいい女の子の方が……」

ブルー「でも、おれ、半分男だぜ」

アキラ「いや、好きになったら男とか女とかは関係ないです！」

ブルー「さっき女の子が良いつて言っていたのに、お前、自分の言ったことに責任感のない男だな」

アキラ「そんなあ……」

ブルー「それに、おれだって、どっちかっていったらかわいい女の子の方がいいぜ。ルミィちゃんみたいな清楚で可憐な女の子が好みだ」

月夜野「カイはどうなんだ？」

ブルー「カ、カイは、特別だ。それによく見ると女顔でかわいいからな。しかし、誰なんだろうな、君に一人で1000票も投票した奴は……」

月夜野「単純作業とはいえ、一人で1000票入れるとなるとなかなか骨の折れる作業だからな」

アキラ「ちょっ、も、もう一人でおれに1000票入れたって決まりかよ」

ブルー「熱烈なファンだな。まあ、たまにおれんところにもそういうの来るけどな」

アキラ「え、ブルーさんのところにもあるんですか？」

ブルー「ああ、結婚してくれとか毎日手紙をよこしてきたり、自分をナイフの的にしてくれとかそんなのかな」

アキラ「ドキドキ……」

月夜野「おや、アキラ、思い当たる節があるのか」

アキラ「い、いや、おれは……でも、おれ……1000票も票が入るようなこと、何もしてないし、普段の生活でもブルーさんみたいにファンレターが来たりするわけでもないし……なんでなのかって……」

ブルー「心当たりはないのか？ 毎日、机の上が自分のところだけ掃除されてるとか……体育の時間に脱ぎ散らかされた制服が、授業が終わって教室に戻ると何故かきちんとたたまれているとか……図書室で、お前が借りたのと同じ本を毎回借りて行ったりするやつとかさ」

アキラ「じ、地味なアピールだな……」

月夜野「まあ、いままで気づかなかったんだから、そういう地味なアピールだったかもな」

アキラ「そういえば……」

ブルー「お、なんかあったか!？」

アキラ「二学期になってから、毎日、立て続けに果たし状が……」

月夜野&ブルー「果たし状？」

山のようなどさっと手紙を二人に見せる。手紙には“時計塔の裏の木の下で待つ”と書かれている。

ブルー「これ、本当に果たし状なのか？」

アキラ「果たし状ですよ。だってその場所に行ったら、そこにいたのは、榊ですからね」

月夜野「榊か」

ブルー「1000票入れたのはその子だね」

アキラ「なんだ、結局おれの票は、嫌がらせか……チェッ」

ブルー「!?!……君って……鈍感なんだね」

アキラ「えっ!?!」

月夜野「ああ、こいつは真性の鈍感だ。まあ、そこが可愛いんだがな」

ブルー「でも、意外だったな、おれはあんたが1位だとばかり思ってたぜ、先生」

アキラ「ブルーさん、こんな変態教師のことがいいんですか!?!」

ブルー「おれがいいと思ってるかどうかじゃなくて、客観論で言ってるんだけど……」

月夜野「まあ、俺の仔猫ちゃんたちはみな恥ずかしがり屋だからな」

アキラ「はあっ……!?!」

ブルー「うちの団長と顔は一緒でも中身は違う……って思ってたけど、程度は案外一緒かもな……」

おしまい

## Popularity vote result round-table talk !!

<http://p.booklog.jp/book/44928>

Luno Teo

<http://p.booklog.jp/users/macky1999/profile>

<http://luno.noor.jp>

illustraton & comic

Dite

text

MACKY

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/44928>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/44928>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.